

有様が解る。もつともかゝる風俗は必ずしも一樣では無かつたであらうし、また傳へる人の見聞の程度によつて相違があつて一致しない所もある。要するに古來これ等の民族の間には、埋葬もあり、火葬もあり、その埋葬のものにおいては概して葬法は手厚く、日用品も共に埋むれば、臣妾獸畜の殉死も行はれたことなどは知る事が出来る。前に並べ掲げた遺物中に、澤山の辮髪の存するのは、この事實を證明するものであつて、イ氏もこれについては比較的長い記述を試みてゐる。たゞその中には殉死でなく、髪だけを形見に葬つたものもあると考へられる。前記の絹で包んだものゝ如きはそれであらう。たゞ棺廓内部の有様が如何で有つたかについては、從來の記事ではほとんど全く知り得なかつた。イ氏の記事も前述の次第でその方面には深く立いつてゐないから、これに關してはコ氏の報告を見得る日を待たなければならぬが、それにしても棺廓の外にまた一室のある構造、また壁かけのある廊下をもつて兩者相通じ、床にはカーペットを敷いた有様、明器の種類などを知り得たことだけでも、興趣甚だ深いものがある。

さてイ氏がその論文の眼目として骨を折つて取扱つて居るのは、その壁かけや敷物として用ゐられた織物の模様についてである。圖は墓の中の一室の床を被うたカーペットの縁邊に、色布を縫ひつけて現はした動物の組合せで、その輪廓はよりひもの刺しうで出來て居る。上圖はねこに類した翼のあるグリフィンがとなかいを襲つて居るもので、となかいの苦惱の有様が、顔や姿勢に非常に善く現はれて居る。下圖は角のある動物が雄牛と闘へる構圖で、これはむしろ兩者互角の勢を示してゐる。さてこれ等の構圖はロシヤの東、裏海の北の邊から、シベリヤにか